月報
岡崎の教育
平成19年2月1日
2月号
発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想 …… 1
愛知教育大学附属養護学校長
都築　繁幸氏
この人に聞く …… 2
体験型有機栽培農園
「てらこや教室」主宰
杉崎利兵衛氏
羅針盤 …… 2
細川小学校長　山本　光昭
ふれあい …… 3
常磐南小　筧　陽子
河合中　伊藤　真平
特集 …… 4
受け継ぎ深める　岡崎の教育
お知らせ …… 6
フォト・ヒストリー …… 8
ジャンボ滑り台（昭和49年）
この本を …… 8

教育随想

個を知る

愛知教育大学附属養護学校長
都築　繁幸　氏

私は、障害児教育の教員を志し、一九七一年に愛知教育大学特殊教育学教室に入学した。

専門科目の最初の講義では、「よく見れば　なずな花咲く　垣根かな」という松尾芭蕉の句の意味を教授が学生に質問された。教授は学生が答えるまでずっと待っておられた。一時間中、沈黙していた。二回目の講義では、「糸賀一雄氏が『この子らに世の光を』ではなく『この子らを世の光に』」と、唱えられている理由を問われた。この時間も一時間中、沈黙していた。三回目では、「障害児教育は教育の原点である、と言われるが、本当にそう思うか」。四回目には、「マルティン・ブーバーの『汝（なんじ）と我』の世界の意味」を問われた。これもお手上げであった。五回目には、「了解するとはどういうことか」と問われた。

これ以降、講義には完全についていけなかった。講義はさっぱりわからなかったが、その教授の下で障害児の療育の支援・臨床活動だけは四年間、やり続けた。

三十年ほど前は、学生の間でも特殊教育を専攻する者は「特殊だ」と言われていた。特殊学級も校内の片隅にあった。入学式の担任紹介で校長先生が特殊学級担任の名前を言い忘れることも稀（まれ）なことではなかった。

その後、特殊教育から障害児教育へ、障害児教育から特別支援教育へと変化してきた。

今、改めて入学当時の講義を思い浮かべているが、障害児教育の担当者のみならず、すべての教師に「子どもをつぶさに見る」、「子どもの良いところを見る」ことが求められているように思う。私は、恩師のような講義はできないが、先生方や学生と「個を知るとはどういうことかをともに考えていく」ことはできると思っている。

（つづき　しげゆき）

土を通して人を育てる

体験型有機栽培農園
「てらこや教室」主宰
杉崎利兵衛　氏

杉崎さんは、教員をされていたころから長年にわたり、環境教育、環境緑化の推進力となって精力的に活動された。退職後も、小中学校緑化活動や生涯学習の講師として活躍されている。更に、昨年の四月から、体験型有機栽培農園「てらこや教室」の活動を始められた。

「今は自由の身になったので、何か一つ奉仕ができないかと思ってね。家には農地がたくさんあるので、それを使い、残りの人生を世のため人のために尽くそうと思って始めたわけです」と話された。活動の様子が写真とコメントでこまめに整理されているアルバムには、杉崎さんの熱い思いを感じる。

「おもちゃやゲームでなく、土に触れる体験を通して、子供たちの心とからだを育てたい。特に、栽培活動を通して命の大切さを知ってほしいという気持ちから、岡崎市内の小学校低学年の児童の家庭を対象に募集しました。わたしが、岡崎で長年お世話になったので、そのお礼として岡崎市在住の子を対象にしました。」

「てらこや教室」には、五十二家族の応募があり、抽選によって十家族が、毎月第三日曜日に杉崎さんの指導のもと、野菜の有機栽培活動を行っている。また、作物を育てる活動のほか、子供たちが更に、楽しく活動できるような工夫を取り入れているそうだ。

「四月は、わたしが育てたイチゴをお土産にし、五月はイチゴ狩りをしてね。七月は、近くの川で魚捕り大会をしました。なかなか捕まらんが、大きな鯉が捕まったときは大騒ぎ。子供たちの喜びようはすごいです。それから、鯉を素手で触らせて、命の大切さを学ぶということで、もう一度川へ戻します。八月は……。」

その後も、話は尽きない。温かな眼差しで、写真を指差しながら話される姿に、子供たちへの深い愛情が感じられる。

「この教室で、人を助けたなあと思うことがあるんです。一つは、四月、お母さんから片時も離れなかった子が、十一月のもちつき大会では、みんなと走り回れるようになったことでね。もう一つは、自閉症で多動気味だった子が、毎月来るのを楽しみにしていてくれて、このごろ落ち着いてきたことです。それと、あいさつのできなかった親子がだんだんできるようになりましたね。土に愛情をそそぎ、触れ合うことによって、人と人が触れ合う。そして、人と人の触れ合いが人を育てる。それが本当の教育だと思います。」

きっぱりと話されたその言葉に、教育に対する信念を感じた。

（氏　　名　すぎさき　りひょうえ
生年月日　昭和五年十一月二十二日
住　　所　西尾市西浅井町干地四五―一）

ものを作るということ

細川小学校長　**山本　光昭**

四十三回目の「造形おかざきっ子展」は額田の子供たちの作品が話題を集めた。会場の中央に位置する広場に展示された作品一つ一つを見ていくと、子供たちの奮闘ぶりが伝わってきた。材質の持つ存在感や制作者の情熱は、見る者の心をしっかりとらえて放さない。ここ数年、忘れていた感覚が戻ってきたような気持ちになった。指導された先生方の苦労は容易に想像できるし、完成までに費やされた時間と労力は、さぞ大変なものであっただろう。会期中指導された先生の話を聞くことができた。材料の入手法や保護者への協力の要請、制作時間の確保など、額田の地域性を生かした材料を使っているとはいえ、我々となんら変わることのない苦労をしていることが分かった。子供をその気にさせ、周りの大

伝え合う喜び

常磐南小　筧　陽子

四月、新しい学校で子供たちとの新たな出会いがあった。男子三人、女子二人の小さな学級。十個の瞳（ひとみ）は明るく輝いていた。その中で、気になったのはA子である。友達とうまくつきあえずに悩んでいた。やりたい遊びが合わないのに、その気持ちがうまく伝えられず、もどかしい思いが重なっていた。

そこで、前任校である形埜小との交流を企画した。A子の世界を広げたかった。当初、A子は不安そうな表情を見せた。しかし、友達と一緒に学区探検をしたり、ザリガニつりをしたりするうちに交流を楽しみにするようになってきた。十月中旬に行われた交流会で、A子は学区紹介を担当した。

「常磐南には、こんないいところがあるんだよ。形埜の子に教えてあげるんだ。きっと喜んでくれるよ。」

交流会前、そう語るA子の姿は、いつもより積極的だった。

十月末、形埜小から「A子ちゃんの教えてくれた牧場に行って、ぜったいに馬に乗ってみたいです」という手紙が届いた。

伝え合う喜びを知ったA子の顔は、今までいちばん輝いてみえた。

A男のやる気

河合中　伊藤　真平

「僕も卓球教室に参加させてください。」

わたしは指導法を学ぶために四月から参加しているのだが、A男がそこに一緒に参加したいと言ってきた。

のんびりした子というのがA男の第一印象だった。そのため、部活動と卓球教室の活動を両立できるか心配だった。しかし、彼は一度も休むことなく参加し続けた。わたしの中で彼の印象が徐々に変わり始めていた。

そんな矢先のことである。新人戦で負けた後、彼は反省の色もなく仲間と談笑していたのだ。「お前の卓球への思いはその程度のものか」とわたしは腹が立ち、彼に厳しい言葉を投げかけていた。彼はうつむき、涙を浮かべて黙っていた。もうやる気を失くしてしまうかもしれない、わたしの中に不安がよぎった。

しかし、次の日の部活動では、卓球教室で教わったことを基に仲間にアドバイスを送る彼の姿があった。以前にも増して真剣に卓球に取り組む姿が見られ、安心すると共にうれしかった。

「先生、明日の日曜日も体育館を開けてください」と休日でも彼はわたしに頼んでくる。わたしはわざと「お前の頼みはろくなことがないなあ」と答えるが、内心では彼の今後をとても楽しみにしている。

人を動かすのは、やはり指導者の熱意だ。

最近、手作りがもてはやされている。歓迎すべきことだ。しかし、どれも短時間で、手軽にできるものが好まれているようだ。残念なことに先生たちが参加している実技講習会も例外ではない。時間の制約という大きな壁がある。しかし、簡単ですぐにできてしまうものは子供たちでさえ、あまり真剣には取り組もうとしない。工夫と努力の末に完成させた満足感を味わうことが、もの作りの醍醐味（だいごみ）と言えるのではないだろうか。

「おかざきっ子展の作品を見直そう、自然素材を使おう」という呼びかけに、初めて参加した額田の先生方が見事に応えてくれた。これを機におかざきっ子展の会場が再び、魅力ある子供たちの作品で溢（あふ）れることを期待する。しかし、本当に考えて欲しいことは、おかざきっ子展の作品をどう作るか、ということではない。ものを作るという行為を通して、いかに子供たちの感性を磨くかということである。手に余る素材と向かい合い、全力で取り組んでいるそのとき子供は成長している。もの作りは人作りと考えている。

受け継ぎ深める 岡崎の教育

▲ 体力づくり（井田小 S59）

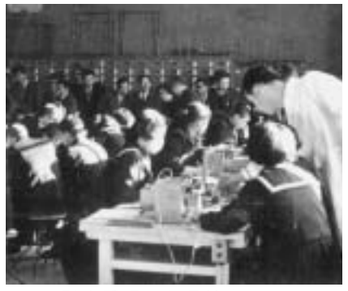
岡崎の特色ある教育の変遷

昭和

32　教科指導員制度設置
33　「道徳の時間」開始
34　科学教育振興費の支給により理科教育が盛んになる
46　LL教室設置（視聴覚教室兼用）
47　体力づくりと健康教育の強化
55　「ゆとりの時間」活用開始
59　パソコン配備開始

▲ わかる学習法についての熱心な協議（竜海中 S57）

▲ 継続される道徳指導（六名小 S59）



▲ 実験を重視した理科教育（甲山中 S33）

▲ 視聴覚機器を利用した指導（美川中 S55）

▲ 一人一人を伸ばす表現力の指導　（矢作東小 S60）

▲ コンピュータの導入（六ツ美中 S59）

平成

4　「生活科」開始
12　教育ネットワーク開始
13　幼・保・小、小・中の連携開始
14　「総合的な学習の時間」開始　学校週5日制完全実施、少人数指導授業導入
15　中核市になり各種研修を市で実施、外部評価導入
16　特別支援教育コーディネーター配置
17　「岡崎スタンダード」作成
18　教員評価制度試行

▲ 生活科・総合的な学習の時間「昔の遊び体験」（岡崎小 H15）

▲ 小・中の交流「うさぎ小屋作り」（常磐小・常磐中 H18）

▲ 地域の方への「森の公園計画」の説明　（形埜小 H18）

▲ 電子黒板を使った指導（藤川小 H18）

▲ 保護者による外部評価（六ツ美北部小 H18）

▲ 学校評価の協議会（大門小 H18）

岡崎市の各学校では、いつの時代も子供たちの確かな学力と健やかな成長を願い、特色ある教育活動を展開してきた。

昭和三十年代は、教科指導員制度が設けられ、基礎技能・基礎学力充実に向けて研究、実践が図られた。基礎・基本を重点とするわかる指導法の研究は今も受け継がれている。道徳指導の研究もこのころ盛んになった。

四十年代に入ると、一人一人を伸ばす学習法の研究が盛んになった。教育機器の活用や学校放送利用の研究も進められ、現在の情報教育へと受け継がれている。体力づくりや健康教育の重要性も叫ばれ、子供たちの体力向上を目指して様々な取組も行われた。

五十年から六十年代にかけては、「ゆとりと充実」をテーマに研究を進める学校が増え、特殊教育の研究も盛んに行われるようになった。

平成に入ると、生活科・総合的な学習の時間の導入により、福祉・環境などをテーマとした研究が進められ、全国発表も行われている。小・中、幼・保・小の交流のあり方や、家庭・地域との連携をテーマに研究を進める学校も増えた。最近では、学校評価など、新しい視点での取組も始められている。

岡崎の特色ある教育は、地域とともに、時代を先取りしつつ、着実に受け継ぎ深められている。

● 教育最新情報

◆愛知県の新規事業（研修）
「あいち授業塾」を通して
教師の授業力の向上を図る

奥殿小学校　高鍬　利行

教師力・授業力・学校力が叫ばれる今、教育の質の保証・向上をめざすため、今年度より、授業力向上支援事業のひとつとして、「あいち授業塾」推進事業が始まった。

○「あいち授業塾」のねらい

若手教員を対象に、確かな指導方法・指導技術、教材解釈・教材開発、授業分析・評価等の実践的な授業力を身に付けるための研修である。

○「あいち授業塾」の組織

各地区の教職経験五年から十年程度の若手教員五名（塾生）と指導教員一名で教科ごと研究グループ（授業塾）を作り研修を行う。研究グループは、小中計十五グループある。なお、岡崎からは青木貴之（六南小）加藤良彦（甲山中）の両先生が塾生として選ばれた。

○「あいち授業塾」の研修方法

塾生の五名は、研究テーマをもとに、それぞれの勤務校で二度の公開研究授業を行う。延べ十回の授業を参観及び授業構想、事後検討を中心に研修を進める。全体会が二回、研究グループでの研修は、二学期を中心に計十六回あり、夏休みや冬休みにも行われる。なお、運営についてはグループごとに教科の特性に合わせて自主的な運営に任される。

○「あいち授業塾」の研修の実際

算数科では、次の二点とその融合をめざし、授業力の向上をねらった。

・授業ビデオや学習指導要領などの文献を利用した算数以外の教科も含めた広い範囲での授業構想

・事前の授業構想や授業後の検討会など、公開研究授業を通した授業作り

○「あいち授業塾」の研修成果

「授業は奥深く完成型がない」「教材研究につきる」「クラスの雰囲気作りが、すべてのベースである」「具体物での体験の大切さを感じた」「話し合いの場や一人一人を大切にする」「考え方を育んでいくことで、よりわかる・できるにつながる」

このように、塾生五名が回を追うごとに一体意識を持ち、真正面から授業に向かっていき気づきを広げた。どん欲に、しかも柔軟に自分の考えを深めていこうとする姿が、成長の原点であると感じた。

▲ 小学校での公開研究授業

◆岡崎市の新規事業（研修）
「授業力・教師力アップセミナー」の成果

六ツ美南部小学校　磯村　彰久

「今までに参加した研修の中で最もよかった」（A教諭）

本事業は、中堅教師の得意分野の伸長と専門性の強化を図る目的で新設された。夏休み初めの連続三日間を活用し、小中の全教科で自由応募し、十年研との統合で開始した。今年度、国語科（小学校の部）では、十九名が参加し、次のように実施した。

一日目。物語文の教材研究の仕方の講義後、二年「かさこじぞう」の指導略案を各自作成。互いに読み合い、協議を行う。

二日目。前日の略案を基に、A教諭が模擬授業を実施し、協議を行う。また、要約指導の方法について実習もする。

三日目。過去に指導員が行った「かさこじぞう」の授業のビデオを観ながら、各自が授業記録を取り、その授業記録を基にグループ協議を行う。論文の書き方についての講義も実施する。

冒頭の感想のように、この研修が価値のあるものとなったのは、参加者の前向きな意識と実践的な内容のためである。

模擬授業を行ったB教諭は、突然の指名にも関わらず、翌日には、実物の蓑（みの）を準備し、効果的に用いて授業を行った。その熱意に応えた他の教諭も、大変活発にグループ協議を行った。

こうした前向きな姿勢は、全ての参加した教諭に見られ、アンケートには、次のような感想が記された。

「緊張した空気の中、みなさんのやる気が伝わり、どのテーマの研修も役に立ちました。特に説明文の要約方法は、『目からウロコが落ちる』思いで……。」（C教諭）

今回、指導員としてうれしかったのは、最終日のグループ協議における発言の内容だった。授業記録を基にした参加教諭らの鋭い分析に、三日間の研修の成果が感じられた。

こうした「来てよかった」と思える研修を行うことで、文字通りの「授業力アップ」につながっていくと信じている。これからも指導員として岡崎の教育の底上げに一層努力をしていきたい。

●表　彰

◆クリエイティブフェスタ横浜・デジタルコンテスト2006

●動画部門
グランプリ　竜海中三年　伊藤千夏
優秀賞　同　中三年　金子文也

●静止画部門
優秀賞　竜海中二年　平崎　瞳
優秀賞　同　中二年　山出紫布

◆デジタルアートグランプリ2006

●動画部門
優秀賞　竜海中三年　柴田　陵
入　選　同　中三年　伊藤千夏

●静止画部門
入　選　竜海中三年　福岡雅幸

◆第八回とよたビデオコンテスト ジュニアの部

奨励賞　※全て竜海中三年
出岡宏二郎・市石　知里
鈴木　崇宏・加藤　貴士

◆第十回ボランティアスピリット賞

全国賞　城北中　三年二組

◆第五回全国こども科学映像祭

優秀作品賞　城北中学校　理科部

◆第四十五回全国学校合奏コンクール全国大会

優良賞　岩津中学校　吹奏楽部

◆第三十一回県三河の菊まつり

愛知県教育委員会賞　千万町小学校

◆国土緑化・育樹運動ポスター原画コンクール

林野庁長官賞
岩津中三年　松野　千夏

◆第十六回読売新聞社主催「地球にやさしい作文・活動報告コンクール」

入選　緑丘小六年　間瀬結子
入選　夏山小六年　黒屋明華

◆第八回「みどりの小道」環境日記コンテスト

銅賞グリーンクロスジャパン賞
緑丘小六年　田中　真美

◆炎天寺一茶まつり「全国小中学生俳句大会」

入選　額田中三年　河合亮多
入選　同　中三年　加藤泰章

◆フラワー・ブラボー・コンクール

秋花壇の部
県教育委員会賞　上地小学校

◆日本郵政公社主催　第三十二回「私のアイデア貯金箱コンクール」

東海支社長賞
六ッ美北部小二年　黒柳美玖

◆県駅伝カーニバル

●男子の部
第二位　六ッ美中学校
第三位　東海中学校

●女子の部
優　勝　竜海中学校
第二位　六ッ美中学校

◆第四十回県教育論文

優秀賞
小豆坂小教諭　池田　芳浩
佳作
美合小教諭　倉地　耕治
三島小教諭　久喜恵理子
大樹寺小教諭　酒井　智之
北野小教諭　片桐　徹
豊富小教諭　太田　円
竜南中教諭　森田　淳一
東海中教諭　荻須　文裕
額田中学校　三年数学部

◆県読書感想文コンクール

●愛知県知事賞
山中小　四年　野口　拓海
竜海中　三年　三浦布由佳

●愛知県学校図書館研究会賞
藤川小　一年　納　央都

●優良賞
羽根小　一年　関口　達弥
男川小　一年　川　実玖
本宿小　二年　小山　零士
竜美丘小　二年　犬飼　京吾
三島小　二年　篠沢　稜
六ッ美北部小　三年　長坂　悠生
常磐小　四年　坂口茉梨江
藤川小　四年　高橋　沙耶
本宿小　五年　本多奏一朗
本宿小　六年　磯谷　早紀
岩津小　六年　三浦日花里
大雨河小　六年　加藤　彩花
甲山中　二年　鈴木　達三
矢作北中　二年　磯部　仁哉
竜南中　三年　山田　千聖
六ッ美北中　三年　平野　愛望

●ハートピアだより

小さくて大きな池

「人間環境大学を過ぎ、点滅信号を右折し、パン屋さんの前を通り越し……。」

これはハートピアの場所を説明するときによく使う言葉で、来られる方が「すぐ分かった」と言われる。実はこの……の所に「小さな池」を入れると説明としては、完全になる。池と言うほどではない小さなものではあるが、ハートピアにとっては意外と大きな存在である。

A君（小一）が通所し始めたころは、いつも泣いてしまい車から降りようとしなかった。近所の子供たちが、ここでよくザリガニを釣っているのを思い出し、A君を誘った。泣きじゃくりながらも、えさの煮干を付けて続けていると、おもしろいほどよく釣れ、バケツがたちまち一杯になった。顔は涙の跡を残しながらも、真剣な顔になっている。それからのA君は、この池が心のよりどころとなり、何かあれば、ここにやってくることが多かった。

B君（中一）は、帰るとき必ずと言っていいほどこの小さな池をじっと見ている。一日の疲れを癒（いや）しているのかどうかは分からないが、後から慌ててみんなを追っている姿を見ることができる。

C先生は、口元を人差し指で押さえながら、「池にカワセミが来ている。静かに！」と言ってみんなを誘ってくれる。小鳥の宝石は枝に留まったり、水浴びをしたりしている。この姿は私たちを癒してくれる。

今年は、十二月暮れに、氷が張り、生き物はここでじっと身を潜めているようである。

まもなく、彼らが再び私たちの心を癒してくれるのを楽しみにしている。

▲ハートピア西側にある池

フォトヒストリー 岡崎の教育

ジャンボ滑り台（昭和49年）

写真提供：岩津小学校

昭和四十七年以降、市内の各学校では学習指導要領の改定を受けて、体力づくりの研究に取り組む学校が増えてきた。

写真のジャンボ滑り台は、昭和四十九年、丘を利用して変化に富んだ運動が行えるよう設置された遊具施設の一つである。丘と下の運動場を結ぶ三十メートルにも及ぶ滑り台は、サーキットコースの中でも人気の高いものである。設置から三十二年間、子供たちの体力増進に貢献してきた。

老朽化のため、一時使用できなかったが、昨年四月に新しく蘇（よみがえ）り、以前と変わらぬ子供たちの歓声が響いている。

・カット　愛宕小　杉原　恵美子

この本を

＊上品な人，下品な人　山崎　武也
ＰＨＰ研究所　¥700

＊人は見た目が９割　竹内　一郎
新潮社　¥680

＊オシムの言葉　木村　元彦
集英社　¥1600

＊日本人の正体　養老孟司・テリー伊藤
宝島社　¥800

＊数学を愛した作家たち　片野善一郎
新潮社　¥680

「坊ちゃん」より数学が得意だった夏目漱石。試験さえなければ数学は面白いという正岡子規。数学ができなくて士官学校不合格の二葉亭四迷。幾何学で女房教育をした石川達三など，東西11名の作家と数学，あるいは作品と数学にまつわる数々のエピソードが繰り広げられている。それぞれの作家の意外な一面をこの本で知ることができるとともに，片野氏の数学及び数学教育に対する思いが伝わってくる。

オアシス

岡崎の多方面にわたる研究校の実践。社会の変化とともに教育環境も大きく変わろうとしている。今だからこそ、諸先輩の研究実践の柱を手本としつつ、今日的課題をテーマに持つことが大切だと感じる。

常に子供と向き合う我々教師の研究実践を心がけたい。

新雪に残された一筋の足跡。ウサギかキツネか野ネズミか……。スキーに出かけても本物には一度もお目にかかったことがない。でも、真新しい雪の上に付いているその足跡を見ると、なぜかうれしくなる。冷たい雪の上で生きる動物たちの存在を、感じることができるから。

朝、駆け足をする学校が少なくなった。確かに寒い中の駆け足はつらい。しかし、我慢することが苦手な子供にとって、自分を鍛える絶好な機会となる。

白い息を吐きながら、真っ赤になった子供の顔からは、純粋さとひたむきさが伝わってくる。

スタートが肝心。来季の優勝を目指して、プロ野球のキャンプが始まった。今季の守備、打撃のデータ分析を基に、選手は厳しい練習に汗を流す。

今年度の実践は、どうであっただろうかと、じっくり振り返ってみる。来年度のプランを練り上げよう。